中学校

平成9年度

教育研究員研究報告書

外国語（英語）

東京都教育委員会

平成９年度

教育研究員名簿（外国語）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
第1分科会	品川区	荏原第六中学校	田谷至克
	世田谷区	北沢中学校	富永智子
	江戸川区	松江第四中学校	多田　渉
	青梅市	第三中学校	◎白石幸晴
	調布市	第四中学校	猪野紀子
	清瀬市	清瀬第五中学校	今本由美子
第2分科会	大田区	貝塚中学校	金久保　勝
	豊島区	西巣鴨中学校	中内葉子
	練馬区	光が丘第一中学校	植田敏幸
	足立区	第十三中学校	小笠原　淳
	町田市	南中学校	高山　猛
	日野市	大坂上中学校	中原明寿
第3分科会	港区	港陽中学校	弘岡　篤
	葛飾区	綾瀬中学校	酒井有為子
	日野市	日野第三中学校	御木聖子
	多摩市	多摩永山中学校	○□五十嵐浩子

◎　世話人　　○　副世話人　　□　記録

担当　教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　　松岡敬明

研究主題

意欲的にコミュニケーションを図り、自己表現力を高める指導の工夫

目　　次

Ⅰ　研究主題及び主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　研究の経過 …… 2

Ⅲ　研究の構想 …… 3

Ⅳ　研究の内容 …… 4

第1分科会

1　小主題 …… 4

2　小主題設定の理由 …… 4

3　仮　説 …… 4

4　具体的な方策 …… 4

5　研究の成果と課題 …… 10

第2分科会

1　小主題 …… 11

2　小主題設定の理由 …… 11

3　仮　説 …… 11

4　研究の内容 …… 12

5　研究の成果と課題 …… 17

第3分科会

1　小主題 …… 18

2　小主題設定の理由 …… 18

3　仮　説 …… 18

4　研究の方策 …… 18

5　指導例 …… 19

6　研究の成果と課題 …… 23

Ⅴ　まとめと今後の課題 …… 24

研究主題

意欲的にコミュニケーションを図り、自己表現力を高める指導の工夫

Ⅰ　主題設定の理由

学校教育においては、これからの社会の著しい変化に主体的に対応し、心豊かにたくましく生きる人間の育成が求められている。この要請に応えるため、一人一人の生徒が主体的に学んでいく上で必要な基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせるとともに、生徒の個性を生かす教育と個に応じた指導の充実を目指す必要がある。

国際化が急速に進展する現在、国際社会に生きるために必要な資質を養うという視点から、外国語教育の目標として、「外国語を理解し、外国語で表現する能力の育成」、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」及び「言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」の３つが設定されている。今日の生徒には、これからの国際社会をよりよく生きていく「国際人」としての資質の育成が強く望まれる。そのためには、我が国の文化や外国の文化への理解を通して積極的に自己を表現し、これを他に理解させようとする意欲・態度を培うことが大切である。

中学校の英語科の指導においては、従来の文法事項中心の授業から「聞く」「話す」ことを中心に、「実際に使える英語」を生徒一人一人が身に付けることができるよう、それぞれの言語活動がこれまで以上に活発になされるよう改善が図られている。生徒たちは自分の思っていること、考えていることを外国語で表現したいという願望をもっている。ＡＥＴが導入されている現在、生徒たちは自分の英語がＡＥＴに理解してもらえるかどうか不安を抱く一方、実際に自分の話した英語がＡＥＴに理解してもらえたときの喜びは、生徒が主体的にコミュニケーションを図ろうとする意欲を高める原動力となる。

そこで、本部会では標記の主題を設定し、３分科会を設け、それぞれにおいて授業研究を通して指導の工夫・改善を図りながら研究を進めた。

第１分科会ではリスニング活動を中心とし、「コミュニケーション能力を高めるための効果的なリスニング指導の工夫」という小主題を設定した。プレリスニングを様々な方法で提示し、生徒の反応を調査し理解の度合いや、その後に続くコミュニケーション活動を工夫して、生徒のリスニングに対する意欲・関心・態度の変容を探り評価を行った。

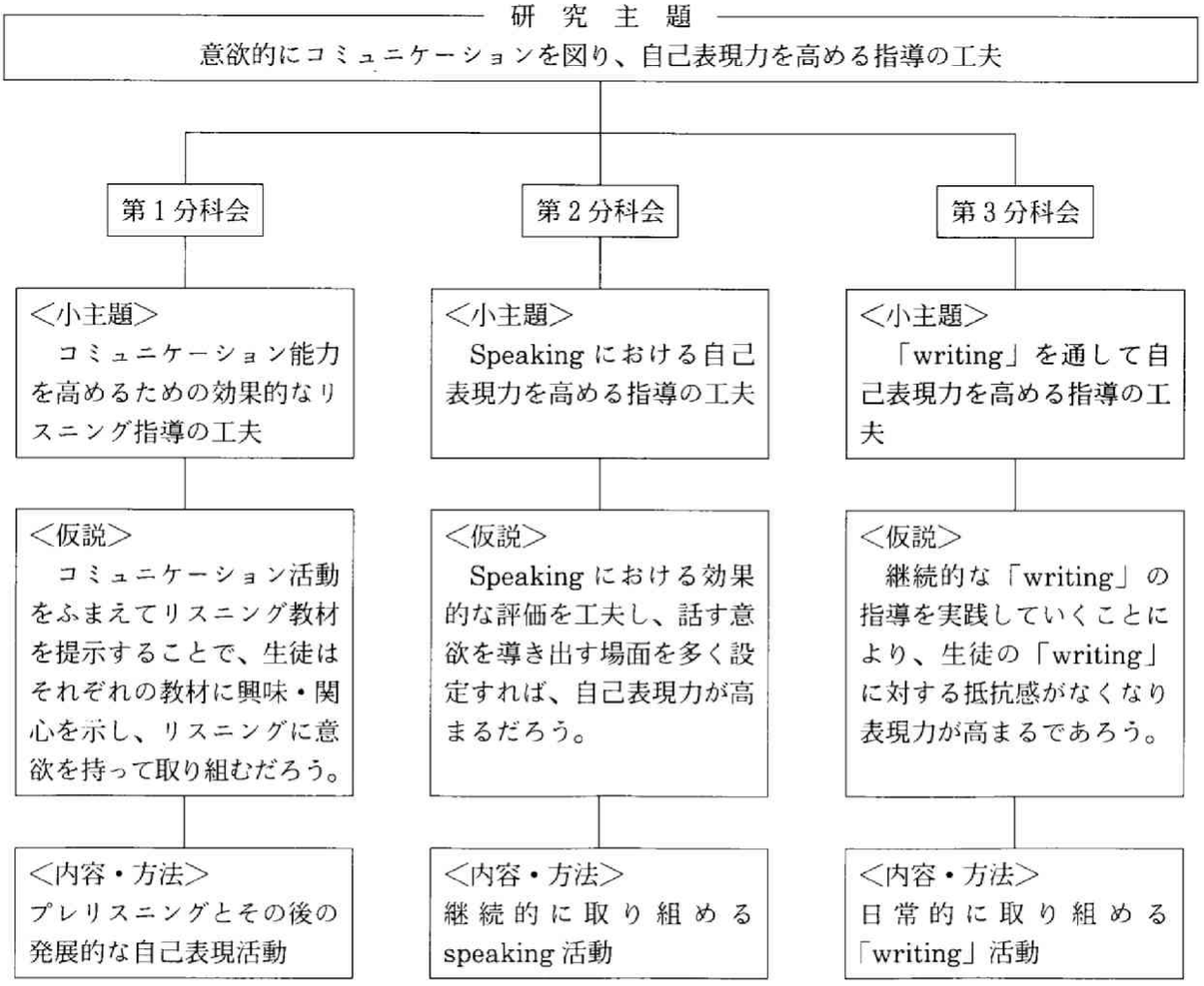
第２分科会では Speaking 活動を中心に、「Speaking における自己表現力を高める指導の工夫」という小主題を設定した。生徒の興味を引き、継続的に取り組める教材の開発と効果的な評価方法の工夫に取り組んだ。実証授業では生徒の欲求を満たすような状況を設定し、生徒は自分の考えていることを主体的に伝えられる活動ができるよう研究を進めた。

第３分科会ではライティング活動を中心とし、「writing を通して、自己表現力を高める指導の工夫」という小主題を設定した。生徒が意欲的に取り組めるライティング活動を探り、その活動を継続的に行うことにより、生徒の自己表現力を向上させる効果的な指導についての研究を行った。

Ⅱ　研究の経過

総　　会	4月11日	都立教育研究所	事業説明、年間予定、世話人等の選出
第1回月例会	5月6日	港区立港陽中学校	研究主題決定、研究の進め方検討
第2回月例会	6月10日	多摩市立多摩永山中学校	研究授業（五十嵐浩子教諭）、研究構想
第3回月例会	6月23日	青梅市立第三中学校	研究授業（白石幸晴教諭）、研究内容
第4回月例会	7月15日	大田区立貝塚中学校	研究内容・方法の具体化、指導計画作成
御岳研究集会	8月20～22日	青梅市御岳山宿坊	問題点の整理・検討、指導案の検討
第5回月例会	9月12日	世田谷区立北沢中学校	実証授業（富永智子教諭）、報告書計画
第6回月例会	10月9日	練馬区立光が丘第一中学校	実証授業（植田敏幸教諭）、内容検討
第7回月例会	10月31日	日野市立日野第三中学校	実証授業（御木聖子教諭）、原稿検討
第8回月例会	11月25日	調布市立第四中学校	最終原稿検討・提出、補助資料の準備
第9回月例会	1月27日	日野市立大坂上中学校	発表会準備、指導案検討、係分担
研究発表会	2月13日	江戸川区立松江第四中学校	公開授業（多田渉教諭）、研究発表

Ⅲ　研究の構想



Ⅳ　研究の内容

第１分科会

1　小 主 題

コミュニケーション能力を高めるための効果的なリスニング指導の工夫

2　小主題設定の理由

生徒は、相手が英語で何を言っているか理解できたときに喜びを感じる。本来、コミュニケーションは自分の考えを相手に伝えることにあるが、相手を理解できてこそ、自分の考えもより的確に伝えることができるものである。

生徒に英語を聞き取る喜びを感じさせることで、意欲的にリスニング活動に取り組ませることができる。また、ペアワークやグループワークを通して、生徒は興味をもってリスニング活動に取り組むことができるようになる。そうすることによってより生徒の意欲を引き出すことになると考えられる。

第一分科会では、リスニング活動をコミュニケーションの一つととらえ、日常の授業でリスニング活動を継続的に行うことで、効果的に自己表現力を高めることができるであろうと考えた。

3　仮　　説

コミュニケーション活動をふまえたリスニング教材を提示をすることで、生徒は教材により興味・関心を示し、リスニングに意欲をもって取り組むであろう。

4　具体的な方策

生徒に意欲的に学習に取り組ませるには、生徒が興味・関心を引くような教材（日常の会話、ニュース、天気予報、映画等）の提示が必要である。このことはリスニング活動においても同様である。すなわち、リスニングを行う上でも、生徒にとって興味・関心のある題材がふさわしい。

内容が難しい話題でも、内容理解のヒントとなるプレリスニングを行うことで、ポイントを絞ったリスニングが可能になり、興味・関心を引き出すことにつながる。本分科会では、プレリスニングの効果を重視し、段階を追ったプレリスニングの提示方法と生徒の反応および理解度を合わせ調査した。ここではリスニング能力を向上させるためにも、プレリスニングを行うリスニング活動を継続的に実施することに重点をおいた。

また、リスニングをリスニングのみの活動に終わらせず、その後の４技能を踏まえた自然な言語活動への導入の役割をもたせるよう言語材料も工夫した。

(1) 効果的なプレリスニングのあり方

生徒の興味・関心をひくプレリスニングを行うことにより、コミュニケーション活動に必要なリスニングの力がより向上するものと考え、各校でプレリスニングの効果を調査した。下記は本分科会における調査結果である＜資料１＞。

英語力にあまり差のないＡ・Ｂ・Ｃの３クラスを対象にＡにはプレリスニングなしでスピーチを聞かせ、Ｂにはプレリスニングとしてスピーチの内容に関連した絵＜資料２＞を見せ、Ｃにはプレリスニングとして Ｂと同じ絵を見せてからさらに内容に関連した会話をしてそれぞれのクラスに下の４つの質問をした。

（内容が正しければ日本語での解答も正解とした。）

1 When is Halloween ?　　2 What do children do on Halloween ?

3 What do children put on Halloween ?

4 What do children say when the person opens the door ?

スピーチの内容

Halloween is the last day of October on the 31st. On Halloween, children put on costumes and go to homes in their neighborhood to get candy. Children dress up as various things. For example, some children are monsters and some are superheros. Traditional Halloween costumes are monsters like vampires or witches. Children go to homes and ring their doorbells. When the person opens the door, the child will say "trick or treat!" Next the person will give the child some candy. Of course anyone can be a child on Halloween and go trick or treating.

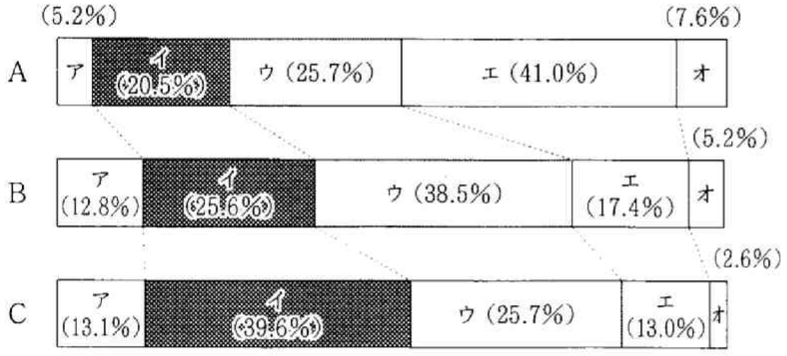
Ａ・Ｂ・Ｃのそれぞれのクラスにおける正解率は下のグラフのようになった。

＜資料１＞

ア　４問中４問正解　　イ　４問中３問正解

ウ　４問中２問正解　　エ　４問中１問正解

オ　４問中０問正解



＜資料２＞

＜考察１＞Ｂのクラスでは絵を見せることによって、生徒は「ハロウィーンについての話を聞くのだ」という心構えをもってスピーチを聞くことが出来た。その結果として、事前に情報を与えられなかったＡのクラスよりも内容の理解度が高くなった。

＜考察２＞Ｃクラスではハロウィーンという行事についての会話をしたことによって、それまでハロウィーンを知らなかった生徒、あるいは知っていても漠然としかわからなかった生徒にとっても、ある程度情報を与えられたことにより興味をもってスピーチを聞くことができた。また、これから聞くスピーチで使われる単語や表現について事前に確認することができたことも、スピーチの内容を理解する手助けとなった。

数校でもほぼ同様の結果を得ることができ、プレリスニングの有効性を認識できた。以下は比較的効果的であったプレリスニングを行った指導例である。

＜指導例１＞　行ってみたい国のスキットを聞く

スキットの内容

A : What country do you want to visit ?
B : I want to visit Australia.
A : What do you want to do there ?
B : I want to see koalas and kangaroos.
And I also want to fish in the Great Barrier Reef. How about you ?
A : I want to go to France. I want to take the T. G. V. line.

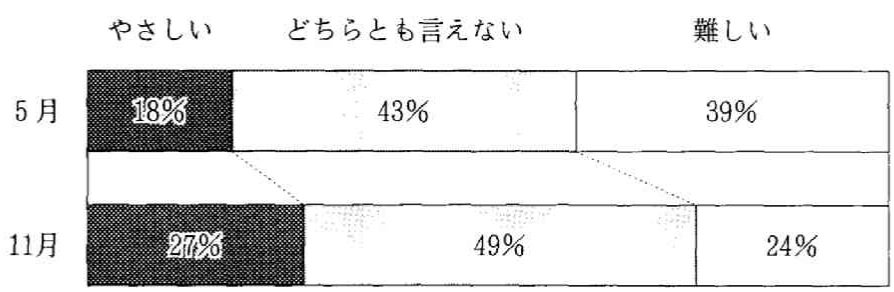
上記のスキットをより興味・関心をもって聞き、理解を深めるために

① 世界地図を見せながら教師自らの事を言う。
② T-S で want to を使った会話をする。
③ 一度聞いた後、スキットに出てくる Great Barrier Reef と T. G. V. の写真を見せる。

(2) 継続的なリスニング活動の必要性

コミュニカティブな英語を目指してさらにリスニング能力育成の重要性が増してきた。そこでリスニングに関する意識調査を５月と11月に２・３年生を対象に実施した。

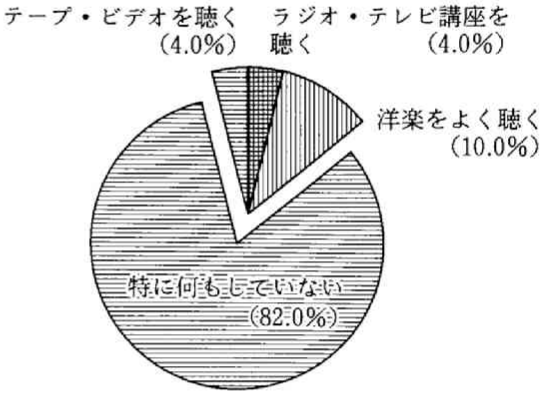
＜グラフ１＞　リスニングに対しての生徒の感じ方



５月の調査では、英語を聞くことに対して抵抗を感じている生徒が４割程度いたが、繰り返しプレリスニングを行った結果、11月の調査では「難しい」と答えた生徒がそれぞれ24%と減少している。また、後述の生徒の感想にもあるようにプレリスニングを行うことで、リスニング教材の内容に興味・関心を示し積極的に取り組もうとする生徒の姿勢が目立つようになった。

リスニングが難しいと感じる理由の大半が、「スピードが速い」「単語と単語の連結が聞き取りにくい」のどちらかに該当する。それでは、「リスニングはどうすれば上達すると思うか」との問いには、生徒自ら「英語に慣れる」「繰り返し聞く」と解答する生徒がほとんどだったが、現実にはグラフ2のような状況で普段からリスニングを心掛けている生徒は少なかった。

＜グラフ2＞　リスニングに関し学校以外で継続して行っているもの



リスニング能力は一朝一夕に養われるものではない。繰り返し集中して聞く練習を積むことによってようやく培われるのもである。例えば、Classroom English 等は、多く用いれば用いるほど生徒はそれを自然に理解し反応できるようになっていく。そのためには、反復や継続が必要不可欠であることは言うまでもない。

それを踏まえて、プレリスニングを継続的に行い、生徒にその感想を尋ねてみた。

＜2年生＞
- 英文のイメージができやすい。　・どんなストーリーか想像しやすい。
- ヒントを与えられて英語を聞くと、その部分を聞こうとするので分かりやすい。
- 英語でも、絵を見て何を言っているのか何となく分かる。
- 分かりやすくなった。絵とかを見ながら勉強すると楽しくなる。

＜3年生＞
- 最初から文字を読むのと違って、内容を音で理解しようとするので聞く力が付く。
- 英語に耳が慣れて、そして聞いて理解できたときに自信がもてる。
- 文字を見る前に、発音や雰囲気を少しつかむことができる。
- 英文を聞いただけで、大体の内容を理解する力が身に付く。
- 集中できるから、内容がよく分かる。
- 文だけではよく分からなくても、絵等があると想像で分かるような気がする。

プレリスニングが内容理解にとって、あるいはリスニング能力を高めるために大変効果的で、重要であることを生徒は実感し始め、特に、題材については、内容をよく吟味できるようになった。また、助言しなくてもメモを取るなど自ら進んでリスニングポイントを押さえた聞き取りを心がけるようになった。

このように、プレリスニングは内容理解を助け、そしてそれを継続することによって、リスニングそのものの基礎力がつき、それは自信にもつながってくる。その結果、生徒は楽しく積極的に授業に参加し、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度が養えると考える。

(3)　コミュニケーション活動への発展

リスニング活動を行うときに、これから聞く内容について生徒の興味・関心を引き出す

ような導入（プレリスニング）が大切であることは前述の通りであるが、もう一つ我々教師が心掛けるべきことは、リスニング活動で終わらせてしまう教材ではなく、そこで聞き取った内容をもとに発展的に言語活動を広げていけるような教材を準備することであろう。

例えば、まとまりのある文章を聞かせ、その内容が把握できたかと言ったことのみを目的にリスニング活動を行うと、生徒はどうしてもどの程度正しく聞き取れたかといった評価に意識が向いてしまい、意欲的に楽しみながらその活動に取り組むという積極的な姿勢は育ちにくい。

しかし、リスニング活動の目的を明確にし、「聞き取ること」が次の活動へのステップであるという意識を持たせれば、生徒はもっと積極的にリスニング活動に取り組むことができるだろう。その「目的」として我々が考えるものは、「聞き取った内容をもとに行う発展的なコミュニケーション活動」である。

下記に具体的な活動例を挙げる。

＜指導例２＞

① 後で生徒同士でインタビューしてもらうことを伝え、その例として教師の話を自分がインタビュアーになったつもりで聞くように指示を出す。

② 教師が自分自身の経験について英文を言い、その内容について生徒に確認する。

（例） I've been to the United States three times.
I stayed with an American family there. etc.
Q：どこに行ったことがあるでしょうか。
何回行ったことがあるでしょうか。
そこではどんなことをしたでしょうか。 etc.

③ ビンゴ用シートを配り＜資料３＞、単語・表現などの確認、ルールの説明。

④ ビンゴになるまで、クラスメートにインタビューをする。

⑤ それぞれが聞き取った内容について発表する。
（例） Mr Yamada has been to Hawaii.

⑥ 発表の内容について、Ｑ＆Ａを行う。
（例） What did you do there ?
How many times did you visit there ?

⑦ ⑥で使った英文をもとに、ビンゴでＹＥＳと答えた人に、いろいろな質問をして情報を集め、記事を書く。＜資料４＞

上記の例のように、リスニング活動を行う際にはただ英文を聞かせるのではなく、その後で行う活動の説明をするなど、聞き取ることの目的を明示することが重要である。そのような意識付けをすることで、生徒の「聞こう」「聞き取りたい」という意欲を引き出し、またリスニング活動だけで終わることなく、書いたり話したりといった活動にも発展的につなげることができる。実際の生活の中では、４つの領域が互いに関係しあってコミュニケーションは成り立っている。そのコミュニケーションの能力を育てるためには、できる

だけ自然に近い場面・状況を授業の中に作り、コミュニケーション活動を体験させる中で、生徒が積極的に「聞こう」「分かろう」とする気持ちをもってリスニング活動に取り組めるようにしていくべきであると考える。

＜資料３＞

LET'S PLAY BINGO !

have been to Kyoto.	have met a foreigner.	have taken an airplane.	have used a fax.	have skied.
have visited the Lions Stadium.	have been to Hawaii.	have played the violin.	have kept a dog.	have visited Tokyo Dome.

☆聞き方・答え方

A : Have you ever _____ ?

B : Yes, I have. / No, I haven't.

※ＹＥＳと答えてもらったときは、その人のサインをもらいましょう。

☆ルール

・同じ人には３つまでしか質問できません。

・縦、横、斜めに（　　）列できたら見せに来て下さい。

＜資料４＞　生徒の Production 例

Madoka has been to Hokkaido.
She went to Hokkaido this summer vacation.
She went there with her family.
She stayed there for two weeks.
She has been there 11 times.
She had a good time.
She went there by air plane.
She went there to meet her grand mother and father.

5　研究の成果と課題

本分科会では、生徒が興味・関心をもってリスニング活動に取り組むための効果的なリスニング教材の導入（プレリスニング）と、そのようなリスニング活動を継続して行うことによる効果、そしてリスニングで聞き取った内容を定着させ、さらに自然な言語活動へと発展させて行う活動について研究してきた。

以下に本研究の成果と課題を述べる。

(1)　成　　果

①　リスニング活動を行う時に、プレリスニングを導入することにより、生徒のその教材に対する意欲・関心を高めることができ、また英語を聞くことに抵抗を感じる生徒が少なくなった。

②　継続的にプレリスニングを行うことで、生徒はリスニングポイントを押さえた聞き取りができるようになり、リスニング活動を楽しみにしている生徒も徐々に増えてきた。

③　聞くことの目的を明らかにすることで、生徒の「聞こう」「聞き取りたい」という意欲を引き出すことができた。また、「話す」「書く」といった活動にも関連させることで自己表現力を高めることにもつながった。

(2)　今後の課題

①　プレリスニングを継続的に行うことによる効果は認められたが、同じような提示方法で行うと、生徒のリスニングに対する意欲・関心の持続が難しくなるので、視聴覚教材を用いるなどの工夫が必要である。

②　発展的なコミュニケーション活動は、年間の指導計画の中で明確に位置づけ、リスニング活動とのより密接な関連を図っていく必要がある。

③　ワークシート等で生徒がどれだけ聞き取れたか確認することはできた。さらに意欲や関心などを含めた生徒のリスニング活動に対する取り組みをより効果的に評価する方法を工夫する必要がある。

第２分科会

1　小 主 題

Speakingにおける自己表現力を高める指導の工夫

2　小主題設定の理由

英語を学んでいく上で、文法的な知識や簡単な会話を学習するだけではなくそれらを実際に使ってネイティブスピーカーと会話をしたり、自己表現が自在にできたら、生徒たちにとってすばらしいことであるし、また励みにもなる。

自己表現とは何だろうか。本分科会は「自己表現」を「自分の考えていることや尋ねたいことなどを何らかのコミュニケーション手段を使って相手に伝えること」と考えた。そこで、コミュニケーション手段のひとつであるspeakingを取り上げ、「Speakingにおける自己表現力を高める指導の工夫」に取り組むことにした。

国際化が進み、英語の授業も少しずつ変化してきた。文法の指導が重視されてきた時代から、現在では、ペアワークやゲームなどの言語活動が継続的に取り入れられ、ＡＥＴが定期的に来校し、ＪＥＴと共にティームティーチングにあたるなど、生徒が実際に英語で会話する場面は多くなった。また、大学や高校の入試にはリスニングテストが導入されるなど、これまで以上に「話す」「聞く」力が要求されるようになってきた。

しかし、効果的で実践的な学習活動をしているはずの生徒たちは、自分たちの言いたいことを相手に伝える「自己表現力」をしっかりと身に付けているのだろうか。

彼らは、授業で習ったダイアログは自信をもって言うが、そこから一歩進んでしまうと口ごもってしまうことが多い。それまで習ってきた言語材料でも十分に自己表現が可能なのに、いざ表現する場面になるととまどってしまう。生徒たちは、「間違えてはいけない」という思い込みから自信がなければ黙ってしまうこともある。確信のもてる英語でなければ表現しないのでは、自由に自己表現しようとする意欲や能力は育っていかない。

また指導者がペアワークなどの言語活動を行う場合でも話す言語に制限を加えてしまえば生徒が表現したいことから離れていくこともある。I like tennis. と言うにしてもそれが自分にとって事実であるのとPattern Practiceなどの練習であるのとは自己表現をする立場から言うと大きな違いがある。

それまでに習った言語材料でいかに自己表現をしていくか。多少の文法的な誤りにこだわって何も言わないのではなく、今もっている力で何とか自己表現すること、またそうしようと努力することが大切ではないだろうか。本分科会では次のような仮説を立て、研究した。

3　仮　　説

Speakingにおける効果的な評価を工夫し、話す意欲を導き出す場面を多く設定すれば自己表現力が高まるだろう。

4　研究の内容

(1)　Speakingの指導における留意点

英語科の授業の中で、話す活動を指導する場面や、その活動のための教材の準備をする場合の留意すべき事項をあげる。

1）発話された英語にたとえ文法のミスがあっても許容し、発話の内容を重視すること。

例）①教師：　What does Takashi like to do？

生徒：　He like play basketball.

教師：　Oh, he likes to play basketball.

②教師：　What did you do yesterday？

生徒：　I swim yesterday.

教師：　Oh, you swam yesterday.

＿＿＿のようなミスに関しては、教師が正しい文で発話の内容を確認する。

2）自分の思っていることや考えていることを表現できる場面をより多く設定すること。

3）設定する場面は、より日常的で、生徒の興味・関心を引き出す内容であること。

4）適切な声量を出す習慣を身に付けさせるように評価していくこと。

5）日々の授業において、継続的に行えるものであること。

(2)　継続的に取り組む指導

ア　コミュニケーション活動の指導例

(1)におけるspeakingの指導の際の配慮事項を普段の授業の中で生かせる活動としてはペアワーク、ゲームなどが考えられる。そこで、この継続的に取り組める指導を中心に、speakingにおける自己表現力を高める指導を工夫して実証授業を行ったり、普段の授業の中でコミュニケーション活動の指導を工夫するなど、実践的な指導を行った。以下はその指導例である。

1）指導例1（三人称単数現在の肯定文）

①　手　　順

まずペアを作る。次に黒板に貼ってある情報カードの内容（ある先生の好きなもの）を暗記し、He / She likes～. を使って相手に伝える。ただし、ペアを組んでいる生徒の情報カードは、それぞれ別のものとする。伝えられた内容は別紙（プリント1）に簡潔に英語で記入する。教師の説明はできるだけ英語で行う。

＜情報カード1＞

Mr. Hotta likes badminton.
He doesn't like Matsuda Seiko.
He likes spaghetti.
He likes "News Station."
He is from Tokyo.

＜情報カード2＞

Ms. Minoshima doesn't like badminton.
She likes Misora Hibari.
She likes ice cream.
She likes "Sekai Fushigi Hakken."
She is from Kanagawa.

② 留 意 点

伝えたい情報の内容に生徒の関心がいくように留意する。

＜プリント１＞

	sport	singer	food	TV program	(A)
Mr. Hotta					
Ms. Minoshima					

((A) には、項目を自分で自由に考えて書き入れる)

③ 評価の観点

a）意欲的に活動しようとしていたか。

b）お互いの英語を聞いて、その内容を理解し、反応していたか。

c）教師の指示を積極的に理解しようとしていたか。

2）指導例２（一人称、二人称、三人称が主語となる文の使い分け）

① 手　　順

まず自由にパートナーを選んで、プリントの内容を参考に、３人の生徒に相手の好きなものを聞き、記入する（解答例)。そこで得た情報をペアでお互いに伝え合う。教師の説明はできるだけ英語で行う。

［たずね方の例：　I like baseball. Do you like baseball？や What sport do you like？など、尋ね方は自由］

［情報交換の例：　He likes tennis. She likes Mr. Children. など］

＜生徒の解答例＞

Partner	(A) sport	(B) singer	(C) food	(D) TV program	(E) from
Mr Hotta	dadominton	doesn't matuda seko	spagety	nyuus steyshon	Tokyo
Ms Minoshima	doesn't badominton	misora hibari	iesku rym	Sekai fusigihaa ken	Kanagawa
Mr Ueda	baseball	smap	hiroshima huuokano miyaki	waratte iitomo	
1) 山口	badominton	kinki	tomato		
2) 羽田野	tennis	spiitu	cake	neyusu	Oita
3) 栗石	badominton	V 6	pafer	megama si TV	

② 留 意 点

英語表現の正確さよりも、情報の中身が話題の中心となるように心がける。

③ 評価の観点

a）意欲的に活動しようとしていたか。

b）お互いに英語を用いて、その内容を理解し、反応していたか。

c）自分の好きなものを積極的に相手に伝えようとしていたか。

d）教師の指示を積極的に理解しようとしていたか。

3）指導例 3（have [has] to ～及びその疑問文）

① 手　　順

☆　家でのきまりについて友人と話し合ってみよう！

Do you have to～？	自　　分	Yes.
study English every day.		
get up at 6:00.		
wash the dishes		
(A)		
(B)		

前ページの表の家でのきまりについて、自分に当てはまるものに○をつける。パートナーを見つけ、「私は～しなければならないのですが、あなたはどうですか」という質問を英語で行う。(A) (B) には上記以外の家でのきまりを記入する。そして、Yesと答えた人にサインをもらう。教師の説明はできるだけ英語で行う。

［例：　A：　I have to study English every day. Do you have to study English every day ?

B：　Yes, I have to study English every day.

No, I don't have to study English every day.　］

② 留 意 点

生徒の情報の内容（家でのきまり）がより具体的に示されるように留意する。

③ 評価の観点

a）意欲的に活動しようとしていたか。

b）お互いに英語を用いてその内容を理解し、反応していたか。

c）教師の指示を積極的に理解しようとしていたか。

イ　自己評価カード

speakingの評価は、より主体的な学習の成立を促すものでなければならない。その場合、教師側からの評価だけでなく、生徒本人が自分の活動を評価することも必要である。そこで、「自己評価カード」を作成し、speakingを中心にした授業におけるコミュニケーション活動を継続的に自己評価させた。評価項目は、コミュニケーションを図ろうとする姿勢が評価の中心になるように設定した。

＜生徒の記録＞

自己評価カード　(11月5日)

2年1組氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

☆　5が最高、1はもっと頑張らねば！

1．　積極的に大きな声を出したか。	⑤	4	3	2	1
2．　英語を聞き取ろうとする前向きの姿勢で取り組むことができたか。	5	④	3	2	1
3．　自分の言葉で表現できたか。	⑤	4	3	2	1
4．　eye contactや相づちを打ったり、ジェスチャーや聞き返しができたか。	5	④	3	2	1

(3) 特別な場面を設定して行う指導

特別な場面を設定して行う指導として、スピーチやディベートなどの他に、次のようなものが挙げられる。これは、教師が生徒のコミュニケーション能力を評価することを前提として、教師と生徒が１対１で行うものである。

生徒はまず、自己紹介、趣味、家族の紹介、毎日の生活、将来の夢、夏（冬）休みにしたことなどのスピーチを30秒程度で行い、それに対して教師が既習の文型を使って質問する。１人、計１分程度である。前半のスピーチに対する評価と、質問に答えた時の評価は、下の "Judge Paper" に準じて行う。

なお、積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢が大切であることを生徒に知らせるため、あらかじめ評価項目を伝えておく方法もある。そのように行うと speaking のポイントを意識しながら話せること、また、日常の speaking 活動の意欲を高めるという効果も期待できる。

この活動をＡＥＴとのティームティーチングで行う場合は、ＡＥＴと生徒が１対１で行い、ＪＥＴは評価をする。その場合、生徒は、ネイティブスピーカーとの会話を通して、英語でコミュニケーションできる喜びを味わうことができる。また、それを大きく評価することにより、speaking の大切さを肌で感じることができる。

Judge Paper

CLASS＿＿＿NO＿＿＿NAME＿＿＿＿＿＿＿

Evaluation

1. Self Introduction					
Pronunciation, Rythm, Intonation	5	4	3	2	1
Loudness, Posture, Eye contact	5	4	3	2	1
Contents	5	4	3	2	1
Attitude	5	4	3	2	1
2. Questions					
Response, Fluency	5	4	3	2	1
Attitude	5	4	3	2	1

Comment, if any

.....

.....

.....

5　研究の成果と課題

本分科会では自己表現力を高めるためには、話す意欲をより導き出す場面を多く設定する必要があると考え、その実践を試みた。またその場面の中で、ある程度文法のミス等を許容することで、より多くの反応を導き出そうと試みた。以下に、その成果と課題を述べる。

(1)　成　　果

ア　身近な情報を伝達するという活動により、より会話に対して興味がもてるようになった。その際、伝達された情報を書き留める活動をするが、わからなければ日本語でもかまわないので、楽しく活動に取り組めるようになった。

イ　文法的なミスを許容し、積極的な反応に対しての評価（ほめ言葉など）を行うことにより、楽に英語を話そうという意欲が出て来た。

ウ　教室内を自由に動き回る場面を増やすことによって、より意欲的に活動するようになった。

エ　設問に対する反応が速くなった。

オ　ミスを許容される雰囲気からか自分なりの言葉（英語）をもち、積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢が生まれてきた。

カ　従来、writing に偏りがちだった評価方法から、speaking に対する評価方法に眼を向けることができた。

(2)　課　　題

課題としてあがってくるのは、やはりその評価方法であった。特別な場面を設定して行う指導での評価や、自己評価用紙の記入などでは成果があったが、speaking における指導者側の評価を継続的に行っていくには難しい点も見えてきた。それについて以下に述べる。

ア　その場での評価（アドバイスなど）

ペアワークや設問に対する受け答えの際、アドバイスをしたり、ほめたりすることが生徒のストレートな成長につながる評価になると考えた。このことを継続していく姿勢が必要である。

イ　継続的なチェック活動（ペアワークの活動中に順調に会話が行われているかを個人的にチェックしたり、発言回数のチェックをする。）

ペアワークの活動を評価する方法として、教師が机間指導して、実際に生徒と会話をしたりそのやりとりを聞いて評価していくもの。この方法では、一度に多くの生徒は評価できないので、継続的に行うことが必要である。また、発言回数のチェックについては、指名方法や質問内容の精選など、生徒にとって公平になるように考慮していく必要がある。

ウ　自己評価カードに記入をする。

自己評価を積み重ねていくと、自分の学習活動を振り返り、修正し、良い点はさらに伸ばそうとする姿勢が生まれてくる。また教師の適切な助言が加わることにより、より効果的な学習の仕方も身に付く。長期的、継続的に行うことが必要である。

細かい点としてその他にも課題は残るが、評価方法にさらに一工夫を加えるべく研究を進めていきたい。

第３分科会

1　小 主 題

「writing」を通して、自己表現力を高める指導の工夫

2　主題設定の理由

インターネットに代表されるコンピュータ通信網の発達やファックス通信の普及などにより、書かれた英語によるコミュニケーション能力の必要性は確実に高まっている。21世紀を目前に控え、中学校の英語教育において、この必要性に応えることが急務であると考え、主題として取り上げることとした。

本分科会では、英語を書くことによって、伝えたいことを表現することを「writing」と呼び、その技能を向上させる指導法の研究を行うこととする。従って、例えば、単語のスペリングの確認のために行われる単語テストや、文法事項の確認のために行われる空所補充問題などは除外される。

3　仮　　説

継続的な「writing」の指導を実践していくことにより、生徒の「writing」に対する抵抗感がなくなり、表現力が高まるであろう。

4　研究の方策

以下の２つを柱として研究を進めていくこととした。

(1)　日常の授業の中で短時間で行える活動の工夫

「writing」の技能を向上させるためには、日常の授業において、継続的な指導を行う必要がある。しかし、一般的に「writing」の活動は、授業における活動、活動後の教師による処理の両方で時間がかかることが多く、このことが継続的指導を困難にしている。そのため、生徒は十分な「writing」の機会が与えられず、習熟の域に達することが難しい。従って、この活動を効果的に行うためには以下の条件を満たす必要がある。

(ア)　授業内で、短時間で行えること

(イ)　生徒へのフィードバックが早く行えること（すぐに返却できる）

(ウ)　生徒にとって取り組みやすいテーマを設定すること

この条件を満たすものとして「My opinion」と名付けた活動を取り上げた。

(2)　まとまった時間を設定して行う活動の工夫

(1)の活動は時間の制約があるため、書かせる量が制限される。十分な自己表現能力を育成するためには、ある程度まとまりのある文章を書かせる機会も作らなければならない。(1)の活動よりも長い時間を設定して行い、テーマも発展性のあるものを提示する。生徒の意欲を引き出すためには、「読み手の存在」を意識させることも重要な要素である。

具体的な指導例としては、手紙文を扱うこととした。

5　指 導 例

(1)　日常の授業の中で短時間で行える活動例　「My opinion」

ア　ね ら い

・「writing」による自己表現力を高める。

・「writing」に対する抵抗感をなくし、自分の言葉を使って書く意欲を育てる。

イ　指導過程

所要時間　　5分～7分　短時間で可能な限り継続的に行う。

手順

①　英文を1つ書き取らせた後板書する。(topic sentence)

・　英文は生徒にとって身近な内容とする。

例　　I like music.　I ate fish for dinner.

②　英問英答する。

・　口頭練習を行うことで生徒に自分の意見を表現するための手がかりを与える。

③　topic sentence を参考に、自分のことについて英文を書かせる。

・　語彙不足によるつまづきを防ぐため、分からない単語は日本語でもよいと指示し、なるべく多くの英文を書くように指導する。

④　回収して評価する。

・　訂正箇所には赤下線を引く。

・　自分の伝えたいことを書こうとしているか、テーマについて自分のこととして考えているかを重視する。

⑤　良い作品、工夫の見られる作品はプリントにして生徒に配布する。

ウ　授業の具体例　1　　(T … 教師、S_1　S_2　S_3　S_4 … 生徒)

T　:　Let's begin today's writing exercise.　Please dictate.

"I washed the dishes after dinner yesterday." (回数繰り返して板書する)

S_1, did you wash the dishes after dinner yesterday ?

S_1　:　No, I didn't.

T　:　Didn't you ?　Then, who washed the dishes ?

S_1　:　....

T　:　Maybe your mother did.　Right ?

S_1　:　Yes.

T　:　O. K.　Thank you.　S_2, did you wash the dishes after dinner yesterday ?

S_2　:　No, I didn't.

T　:　No ?　Then, who washed the dishes ?

S_2　:　My mother.

T　:　Oh, your mother did.　Thank you.　O.K.　Everyone, please write your answer.

生徒作品例　1
（3学年）

3. I washed the dishes after dinner yesterday.
I was not washed the dishes.
Because this 仕事 is Mother's.

授業の具体例　2

T　：　Please dictate. "I like to read books."
　　S_3, do you like to read books?
S_3　：　Yes, I do.
T　：　What kind of books do you often read?
S_3　：　Ummmm...
T　：　Do you read novels? Do you read dramas? Do you read comic books?
S_3　：　Comic books.
T　：　Good. Thank you. S_4, do you like to read books?
S_4　：　Yes, I do.
T　：　What kind of books do you read?
S_4　：　Comic books.
T　：　I see. (To class) What kind of comic books do you read?
S_3　：　Jump! Shounen Magazine! etc.
T　：　Then, you can write your favorite comic books or magazines you buy every month. You can also write your favorite writers.

生徒作品例　2
（3学年）

1 I like to read books.
I like to read jamp.
Jamp is interesting
I buy jamp. every Monday.

4　考　　察

この「My opinion」の手法を用いての指導を始めたところ、生徒達は教師側の予想よりもはるかに意欲的に取り組んだ。回を重ねるにしたがって、短い中にもストーリー性のある文を書く生徒（生徒作品例3）や、教師とコミュニケーションを図ろうとする生徒（生徒作品例4）も現れてきた。また、自由に自分の考えを書いてもよいというこの作業は生徒の気持ちをリラックスさせ、活動的な雰囲気を作り上げるのにも役立った。プリントなどで他の生徒の作品を紹介すると熱心に読んでお互いを認め合い、新たな文を書くときの参考にしていた。

生徒作品例　3
（3学年）

6. I was very tired and went to bed early yesterday.
I was very tired, because my bike is broken yesterday.
I went to Jyuku on foot yesterday.
I was very hungry yesterday.

生徒作品例　4
（3学年）

11. I am good at cooking.
I am good at handwork. It's very interesting.
How about you? I'm poor at it.

(2)　まとまった時間を設定して行う活動例　「手紙文」

ア　ね ら い

・「My opinion」を基本とし、より内容の濃い「writing」につなげる。

・自分の気持ちや考えをできるだけたくさん表現させる。

イ　指導過程

所要時間　約20分

手順

①　書かせる手紙のトピックについて英問英答する。

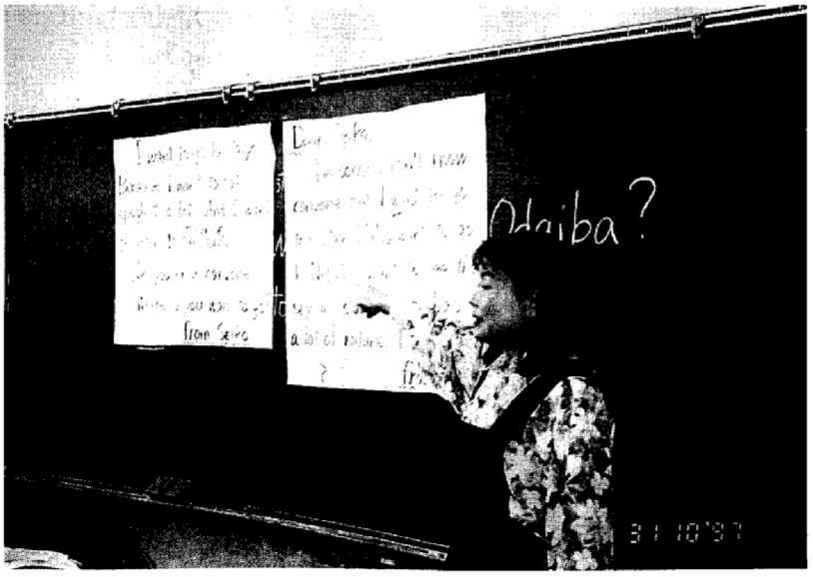
②　相手を想定して自分の考えを書く。

・読む人への質問は必ず入れるように指示する。

③　書いた手紙をクラスの中で回す。受け取った手紙を読んでその場で返事を書く。

④　書き終わったら差出人に返す。

⑤　回収して評価する。



生徒作品例　5
（２学年）

I want to go to France
Because I want to watch がいせん門 and
エッフェル塔. I want to go to Disneyland too.
Where do you want to go?

from Miyuki

Dear Miyuki
I want to go to France, too
But I want to go to Tahiti.
Because The Sea is good.

from Ayako

I want to go to Australia. Because it is hot
in Australia. and I want to look Australian animals.
Australian animals is interesting and beautiful.
Where do you want to go?
from Yoshiaki.

Dear Yoshiaki
I want to go to Switzerland.
Because I want to look Mountain.
Swizerland の Mountain is very beautiful.
But I want to go to Australia, too.
from Kaori

4　考　　察

短時間で、ある程度イメージをふくらませ、まとまりのある文を書くということは中学生レベルとしてはかなり高度な学習である。しかし、「手紙文」の活動では生徒が自然に取り組む姿が見られた。これは、「My opinion」による継続的な指導の結果、「英語で表現したい」「英語でも書ける」という意欲的な姿勢が育ってきたからだと思われる。一方、「手紙文」においては、「My opinion」にはなかった「読み手の存在」が、具体的なコミュニケーションを成立させ、生徒の意欲をより引き出していたと考えられる。

生徒の感想
（２学年）

授業の始めにやる、先生の質問に答えるやつが私は好きです。答えを考えるのも楽しいし、someday にのったりするのもはげみになります。これからも続けてほしいと思います。

英語の授業でやる自己表現プリント。あれはけっこうおもしろくてしかもためになる、とてもいい勉強法だと思います。おかげで英語の絵日記などが書けるようになりました。Thank you.

6　研究の成果と課題

本分科会では、英語を書くことによって、伝えたいことを表現することを「writing」ととらえ、その効果的な指導法を研究してきた。その結果、次のような成果が得られ、課題が明らかになった。

(1)　成　　果

ア　「writing」に対する抵抗感が薄れた

与えられた文を参考にして自分のことについて表現する「writing」は、生徒にとって無理のない活動であった。普段どちらかといえば無気力な生徒でも意欲をみせるようになった。次第に多数の生徒が短時間に２～３の英文が書けるようになってきた。

イ　徐々に表現力がついてきた

自分が表現したいことを、既習の文型を上手く取り込む生徒が見受けられるようになった。また英問英答で紹介した文や印刷された友達の文を利用して、単文を羅列した状態からI think.... や ..., because～などが使えるようになった。

ウ　「My opinion」「手紙文」は取り組ませやすい手法であった

前者の活動は、文法上の誤りなどを主に訂正し、検印を押すのみで返却することに留めたため評価しやすく、生徒へのフィードバックが早く行えたこと、３～４回分まとめて１枚のプリントを作成したので、短時間で、効果的に準備できたことが教師にとっても継続を容易にした。

特に「手紙文」の活動では教室内に「読み手の存在」を意識させることにより、効果的なコミュニケーション活動の機会を与えることができた。

(2)　課　　題

ア　テーマについては、さらに幅広いものを考え、日頃から書かせたいトピックの収集に努めたい。例えば生徒からトピックとなる文を引き出す工夫も可能であろう。また、目標とする語彙や文型を明らかにして系統的に例文を選定していくことが必要である。そのためには、年間指導計画の中で位置づけていかなければならないと思われる。

イ　語彙によるつまづきを防ぐため、未習語等に関しては、単語レベルでの日本語の使用を容認する形で「writing」の活動を行ってきた。さらに、生徒の抵抗感を減らすためには、必要な関連語句や関連表現の提示の工夫も検討していかなければならない。

ウ　生徒の変容は、生徒の反応と教員側の日々の授業での観察である。生徒の書く力がどうついてきたのか客観的に評価できるより効果的な方法を探っていきたい。

エ　将来的な取り組みとしては、さらにより内容の濃い「writing」活動をさせるために論理の展開やパラグラフ構成なども指導していく必要がある。

V　まとめと今後の課題

コミュニケーション能力とは、単語や文法の知識・理解をもとに、それらを十分に活用して「概要や要点」を理解し表現するために、実際に英語を使用する力であろう。このコミュニケーション能力の育成のためには、様々な言語活動を通して、実際に英語を使用する機会を多く設定しなければならない。その活動の中で、生徒は積極的に相手の意図を理解し、自分を表現する経験を重ねていく。同時に相手といかに理解し合えるかがコミュニケーションにおいて重要であることに気づいていくのである。このコミュニケーション能力こそが、これからの社会を生きていくうえで欠くことのできない［生きる力］につながっていくと考えられる。これをふまえて我々は研究主題を設定し、listening、speaking、writing の 3 領域で共同研究してきた。

第 1 分科会では、プレリスニングの工夫と評価について研究を進めた。生徒の興味・関心を引くような教材を与えて取り組ませるだけでなく、聞かせる前に意識的に内容の要点を問いかけたり、新教材の提示で生徒の持っている知識を活性化させるための補助的な説明・Q＆A を行うことで、明確な目的を持ったリスニング活動ができることを明らかにした。プレリスニング活動が生徒の期待感を刺激し、内容に関する予測を立てさせたわけであるが、さらにリスニングのみに終わらせず、他の技能を視野に入れた活動をすることで実際のコミュニケーションの場面に近づける工夫もできた。

第 2 分科会では、speaking におけるコミュニケーション活動を研究した。生徒は自分の言いたいことや尋ねたいことを英語で表現したいという気持ちは誰しももっているのに、実際話す場面での意欲につながらないことがある。そこで生徒が自己表現できる場面を多く設定し、生徒が自己表現をした時にはその内容や意欲を積極的に評価することにした。文法的な誤りについては指導者が正しく言いかえてやることで生徒の誤りに対する恐怖心を減らすことができた。また学習した英語を使って自分の考えを表現できる活動や日常生活により近い場面を設定することで積極的に取り組む生徒が多くなった。

第 3 分科会では、writing を中心としたコミュニケーション活動を取り上げた。「概要や要点が伝わる」ように書くことが求められているが、そのためには、語彙・文法やパラグラフの構成ばかりではなく場面や目的に合致した様々な学習を必要とする。生徒の持つそれらに対する抵抗感を減らすには、身近なテーマで自分を表現する機会を授業の中で継続的に与えることが効果的であた。また手紙文は読み手の存在を意識させることで、コミュニケーションとしての writing 活動が実施できた。

一つ一つの領域から研究主題にせまる過程で、コミュニケーション能力の育成には、各領域を相互に関連させた統合的な言語活動が不可欠であることを改めて認識した。生徒に活発にコミュニケーション活動を行わせるためには、生徒の意欲や取り組みをどう評価するかも常に考慮していく必要がある。研究を通して日々の授業に取り組み、試行錯誤を繰り返しながら、我々が、英語を教える意義とは何か、英語を通して生徒に何を学ばせたいのかという問題意識をもてたことが大きな収穫であった。今後も研究員それぞれが、各校・各地域において、3 つの分科会で明らかになった課題の解決にむけて研究を継続していきたい。